詩余ものがたり 唐五代篇

――清・葉申鄉『本事詞』――

松尾肇子 訳

はじめに

原著の『本事詞』は清の葉申鄉（しょうしんきょう）による詩話である。詞とは唐朝に生まれ宋朝に隆盛を極めた歌辞文芸の歌詞を指し、曲を失った清朝以降は長短句の韻文文学として文人に愛された。中国では詩詞と併称され、現在もなお愛好者は多い。詩話は詩詞に関する随筆であり、作品評論や詩人のエピソード、あるいは文学論など、内容は多岐にわたる。就中「本事」の名称は唐の孟棨（もうけい）の『本事詩』に始まり、詩人の逸話が作品とともに語られる。本書は、葉氏が各種の詩話から詞（とくに艶詞）の話を抜粋して手を加え、およそ作者の生卒年に従って配列したものである。同工異曲の話が数種の書物に見られることも、また詞句の異同も少なくないが、本稿では底本とした上海古籍出版社一九九一年発行の『本事詞』にしたがった。

日本での填詞は、嵯峨天皇の御製に始まる。とはいえ、詞を読む日本人は少ない。日本填詞の詳細は神田喜一郎博士の『日本における中国文学』（初版一九六〇年、全集第六・七巻、同朋舎、一九八五年）を参照されたい。本稿では詞を紹介することを企図し、原文および原文に見える校訂部分は割愛し、注は付けず若干の説明を（ ）で補うに止めた。奥野信太郎氏による『本事詩』の名訳「うたものがたり」（『世界短篇文学全集』十五、集英社、一九六三年）には到底及ばないが、それにあやかり、日本で詞の別称として一般に用いられてきた詩余をかぶせて「詩余ものがたり」とした。全篇は元朝までを収録するが、まずは、酒席の小唄にすぎなかった詞が詩人に取り上げられ洗練され始めた唐五代の部分を、通し番号と詞人名を標目として掲載する。なお、訳文の〔 〕は題に似ているが曲調を示す詞牌である。

一、唐の白居易（はくきょい）

呉二娘（ごじじょう）は、江南の名高い芸妓で、歌が上手でした。白居易が蘇州（そしゅう）の長官だったとき、〔長相思〕の詞を作りました。

深く眉を描き、
浅く眉を描く。
美しい髪は乱れ、雲が衣に満ちている。
（楚の王と巫山（ふざん）の神女が契ったという）陽台（ようだい）は雨（となった神女）が帰ってきた。
巫山は高く、
巫山は低い。

夕暮れの雨が淋しく降るのに、あなたは帰ってこない。
空っぽの部屋でひとり過ごす。

呉二娘は好んでこれを歌いました。白居易の詩の句に「夕暮れの雨が淋しく降ると呉娘が歌うのを、江南を離れてから久しく聞かない」と詠んだものがあるのは、これを指すのでしょう。

二、唐の李徳裕

〔望江南〕の原の名は〔謝秋娘〕と言いました。李徳裕が浙西に観察使だったときのこと、亡くなった歌姫謝秋娘のために作ったのですが、その詞はずいぶん前に失われてしまいました。今伝えられているものとしては白居易の〔江南好〕や劉禹錫の〔春去也〕などがあります。宋朝になってからは〔繰り返して歌い、二段の〕双調になりました。隋の煬帝が作ったという〔双調の〕〔湖上曲〕八首はおそらく偽作でしょう。

三、唐の張褘

張褘は寵愛していた歌姫を亡くし、嘆きは尽きませんでした。甥の張曙は慰めに〔浣溪沙〕を作り、密かに机の上に置きました。

枕元の屏風も香炉も刺繍のとばりの向こうで冷たい。
この二年ずっと苦しく思い続けてきたけれど。
杏の花にも明るい月にも気づかねば。

天の上か人の世か、どこへ行ってしまったのか。
昔の愛の夢が消える時。

夕暮れのそぼ降る小雨に、美しい簾を降ろす。

張褘はこの詞を見て嘆き悲しみ、「これは阿灰が作ったに違いない」と言いました。阿灰というのは張曙の幼い頃の呼び名です。

四、唐の黄損

商人の娘裴玉娥は箏が上手で、黄損と婚約していました。のちに呂用之にむりやり屋敷に押し込められたのを、胡僧の不思議な術で取り戻すことができました。黄損は彼女のために箏の詞を作ったことがありました。

願いとてないが、叶うことなら楽器の箏になりたい。
美しい人の細い手に近く、つややかな薄いスカートの上で美しい声をあげられるならば、
たとえ死んでも栄誉なことだ。

五、南唐の元宗 李璟

金陵の芸妓王感化は歌が上手で、詞文も作れました。元宗は〔山花子〕二首を手ずから書いてお与えになりました。

蓮の花の香りは消え、緑の葉は枯れ破れた。
緑の波間を秋風が愁いとともに吹いて来る。
美しいすがたと共に衰えて、見るに堪えない。

そぼふる雨に夢から覚めれば（あの人がいる）とりでは遠い。
小さな楼閣で吹きやむ玉笙の音はひややか。

どれだけこぼれ落ちたか涙の珠 この恨みに限りなく、（ひとり）
欄干に立つ。

また、もう一首。

手ずから真珠（の簾）を巻いて玉の鉤に掛ける。
以前のままに春の恨みは重なる楼閣を閉ざす。
風の中に舞い散る花 誰がそうするのか、愁いうつうつ。

（恋の便りを運んでくれる）青い鳥も雲の彼方のあの人の便りを
届けてはくれない。
香り高い丁香は空しく雨の中に固く結ぶ、私の愁い。
振り返れば 緑の波が三峡の暮れ 空に連なって流れていく。

王感化は、後主の御代になってその詞札を献上しました。後主はこころ動かされ、殊勝であると王感化にお与えになりました。

六、南唐の後主 李煜

南唐の李後主の小周后は、昭恵后の妹です。昭恵后が病気になると、小周后は禁中でひそかに後主と情を交え、後主は彼女のために〔子夜歌〕を作りました。

花は明るく浮かび月は暗く 薄い霧がたちこめる。
今宵こそあなたのもとへ行くのにうってつけ。
靴下になってうつくしい階段をおりる、
手に金のぬいとりの靴を提げて。

彩り美しい建物の南のかげでしのびあう。
しばし寄り添い震えていた。
私は出てくることが難しいから、
今こそあなたに思う存分愛させるの。

またこういう詞もあります。

銅笙の音色は清らかで、寒竹のようにそうそうと音をたてる。
新しい曲をゆるやかに奏でて美しい指が移っていく。
目配せしてこっそりと誘い、
秋波はあふれんばかり。

雲雨は女性の部屋に深く、
来ればすぐさま心を通い合わせる。
宴が終わればまたひっそり。
夢は春の眠りの中に迷う。

この詞が広まって、だれもがこのことを知るようになりました。そこで（妹を）納れて皇后とし、群臣を招いて盛大な宴を催し、韓熙載をはじめ、多くの臣下が詩を作っていさめましたが、後主は彼らを咎めませんでした。

七、南唐の張泌

張泌は南唐に仕えて内史舎人になりました。それより前に隣の衣を洗う女性と仲良くなり、〔江城子〕を作りました。

浣花溪のほとりできみを見初めた。

水波のような眼差し、
ほのかな眉。
高く結い上げた黒髪には、金細工の小さなトンボの群。
思い切って「来ないかい」と誘ったが、
笑いながらの答えは、「気が多くていらっしゃること」。

その後何年も再び会うことはありませんでしたが、張泌には夜中に彼女を夢に見ることがあり、次のような絶句をおくりました。

別れても心ひかれて夢の中で美しいひとの家を尋ねた。
小さな廊下がめぐり闌干が続いている。
心痛めれば 春の庭の空にかかる月が、
ひとりぼっちの私のために舞い散る花を照らしてくれるばかり。

八、宋の五柳公 陶穀

宋は陶穀を江南（に残る南唐）に遣わしました。李憲は書簡を（南唐の）韓熙載におくりました。「五柳公はひどく驕りたかぶっているので、うまく接待してください。」陶穀がやってきたところ、李憲が言ったとおりでした。韓熙載は親しい人物に言いました。「陶穀は心ふるまいが正しい人物ではないから、節を守れまい。諸君を笑わせてさしあげようではないか。」そこで歌姫の秦弱蘭に、粗末な衣服を着せ、宿の娘と偽って、酒をつがせ宿の掃除をさせました。陶穀は秦弱蘭を見て気に入り、身を慎むという戒めを忘れ、このような長短句を贈りました。

よい巡り合わせか。
悪い巡り合わせか。
詩余ものがたり 唐五代篇

宿場に一夜やどをとって、
あいまみえたのは神女か仙女か。
琵琶がかき鳴らすのは相思の調べ。
けれどその音を知る人はいない。
切れた琴の糸を再び鸞膠で繋ぐのは、
いつのことだろう。

後日、後主が宴を開いて陶穀をもてなしたところ、陶穀はきりりとして侮辱することができないようすでした。後主は杯を持つと弱蘭を呼び出し、前に陶穀が彼女に贈った詞を歌いながら酒を勧めさせたのです。陶穀は大層恥じ入って退席しました。この調名は〔風光好〕といい、どの本も陶穀の作だとしているのに、『湘山野録』だけが「曹翰が江南に使いをした時に芸妓に贈った詞だ」というのは、何に依ったのかまだ分かりません。

九、南唐の盧絳

南唐の盧絳がまだ仕官していなかった時のこと、おこりを患って、白い服を着た女性が詞を歌って酒を勧める夢をみました。このようなものでした。

都からは人が去って秋はものさびしい。
美しい軒端から（幸せを告げるという）かささぎが飛び去って梧桐の葉が落ちた。
枕にもたれ愁いに沈んで言葉も無い。
月は美しい夢と丸く浮かんでいる。

灯火をそむけてひそかに涙を流す。
どこなの、せわしげに砧を打っているのは。
稜線のような眉をひそめれば、
芭蕉に夕暮れの寒気が生まれる。

そして白い服の女性は盧絳に言いました。「あなたの病は、甘蔗を食べれば治るでしょう。」そのとおりにすると本当に病が治りました。数日後、またこの女性を夢に見たところ、彼女は「私は玉真です。あなたは高貴な身分になるでしょう。そのとき、固子坡で会いましょう」と言いました。盧絳はそののち（南唐の都）金陵で仕官して柱国にまでなりました。しかし南唐が宋に降伏し、龔慎儀の（抵抗に荷担した）ために処刑されることになりました。いよいよ処刑される時、白い服を着た女性がともに斬られたのでしたが、夢に見た人にそっくりでした。姓名を尋ねると耿玉真で、その地は固子坡でした。

十、前蜀の後主 王衍

前蜀の君主だった王衍は、先が錐のように尖った小さな頭巾がお気に入りでした。宮廷の歌妓の多くは道士の服を着て、蓮の花の冠をかぶり、紅を塗った顔の額と顎とを白く塗り、これを「酔妝」と言いました。王衍はみずから〔酔妝詞〕を作りました。

こちらに行き、
あちらに行き、
ただ美しいひとを尋ねる。

あちらに行き、
こちらに行き、
金杯に注がれる酒には飽きることがない。

晩年には、道教をますます篤く好み、いつも青城山で祈祷し、随行する宮女たちはみな雲霞を描いた道服を着ました。王衍は〔甘州曲〕を作ってみずから宮女と共に歌いましたが、それはとても悲しげで怨みがましい音色でした。

美しい模様の薄絹のスカート、
身にまとえば、腰のあたりが美しい。
柳のように細い眉 桃花のように美しい顔は、春にもたえられない風情。
わずかになまめかしい様子は気品に満ちている。
惜しいことよ、落ちぶれて俗世にいるとは。

王衍の本意は仙女が俗世にいるというだけのことでした。けれども後に中原（の後唐）に降伏し、その宮女の多くが民間に身を落とすこととなり、そこで初めてその予言だったと分かったのです。

十一、後蜀の後主 孟昶

後蜀の君主だった孟昶は命令を下して、都をとりまく羅城一周四十里全てに芙蓉を植えさせました。芙蓉が満開の時、側近に「昔は蜀を錦城と呼んでいたが、今この羅城を眺めると、これこそまことの錦城である」と言いました。ある時、深夜花蕊夫人と一緒に摩訶池のほとりで夕涼みし、そこで〔玉楼春〕を作りました。

氷の肌と玉のからだとを持つ美人は、清らかで汗ばみもしない。
池のほとりの御殿に夜風が吹いて、芙蓉のほのかな香りが満ちて

いる。
刺繍をほどこした美しい簾のむこうにぽつんと浮かんだ月がこちらを窺っている。
枕に横たわればかんざしはぬけおち美しい鬢が乱れる。

起き上がって玉の扉を開くと 物音一つしない。
時折まばらな星が天の川を渡るのが見える。
秋を告げる西の風はいつ吹いてくるかと指折り数える。
気付かぬうちに年月が流れ去ることだけがおそろしい。

これは蘇軾が、朱という老尼が語ったのを覚えていて〔洞仙歌〕に筆を加えたものです。さてまた趙聞礼の『陽春白雪』にはこのように載せています。「蜀の将軍謝元明は、摩訶池を浚って、孟主の〔洞仙歌〕の原詞を刻んだ古い石を手にいれた。

氷の肌と玉のからだとを持つ美人は、
清らかで汗ばみもしない。
貝殻で飾った宮城 玉で飾った宮殿に、恨みはやっと遠ざかる。
玉の欄干に寄り掛かり、
朝の寒さにおびえ、
振り返って（西王母のように周王）穆満を引き止める必要などあろうか。

芙蓉の花が開くと、
楼閣に香りが融け、
千片の紅い花びらが波間に浮かんでいる。
奥の部屋は深く深く閉ざされている、
小舟を浮かべてはいけない、

詩余ものがたり 唐五代篇

仙女の住む瑤台へと去って、
俗世との道が断たれるのに甘んじよう。
そこからは、紅い花びらを人の世に流してくださるな。
心配なのは そのむかし、
（花びらに引かれて遡り仙女に会って帰るのを忘れた）劉晨と阮肇のように道を誤ること。

異なる詞句を伝え聞いたので、とりあえずこれを記録し備考とする。」

十二、後蜀の花蕊夫人

後蜀が滅び、花蕊夫人は孟昶に随って北（の宋の都開封）へと連行されることとなり、葭萌の宿場に到着した時、館の壁にこのように書き記しました。

初めて蜀へ通じる道を離れ、この心は砕けそう、
別れの恨みは途切れることなく続く。
春の日はいつもの年のようなのに、
馬の背でずっと（帰ったほうがいいよと鳴く）ほととぎすを聞く。

まだ書き終わらないうちに、出発を促されました。詞はわずか半分ですが、まことに一字一涙です。だれかわからないけれど、これに続けて、

三千人の宮女は花のかんばせ、
中でも私は最も美しい。
これから天子のみもとへ向かうが、
天子のご寵愛が私にばかり偏ってしまうのではないかと心配だ。

と作りましたが、話になりません。

十三、後蜀の韋莊

韋莊は、字を端己といい、その才能と名声とによって蜀に身を寄せておりました。王建が（後蜀の先主となって）占拠して、そのまま韋莊を留めました。韋莊には寵愛するひとがいて、姿はあでやか、それに詞に腕をふるっていました。王建はこのことを聞き、宮女に教えさせると称して、無理やり彼女を奪い去ったのです。韋莊は彼女を思って恨み悲しみ、いつも思いを詞に詠じました。〔荷葉杯〕、〔小重山〕、〔謁金門〕の諸篇はすべてこの歌姫のために作ったのです。もの悲しいその詞を、人々は伝えうたいました。彼女はのちにこのことを聞き、食を絶って死にました。〔荷葉杯〕の詞はこういうものです。

絶世の美人は得がたくて、
国を危うくするほど。
花の下で君に会いたいけれど いつのことか。
愁いを帯びた遠い山の稜線のような眉。
これ以上君を思うことには耐え切れない。

金の鳳凰が描かれた緑の屏風をしずかに閉じれば、
夢だけが残る。
薄絹のカーテンのかかる美しい座敷には君がいない。
青空へ続く道は無くて 便りを届けることは難しい。
君がかつていた部屋の窓辺で恨み悲しむばかり。

〔小重山〕はこういう詞でした。

一たび（後宮の）昭陽宮に閉ざされてから 春また春。
宮殿の夜は寒く水時計は永遠の時を刻む。
あなたの御恩を覚えている。
過ぎ去った出来事をつぶさに思い出しては悲しみに打ちひしがれる。
薄絹の着物は涙に湿り、
紅の袖には涙のあと。

歌や笛が幾重にも重なった宮門を隔てて聞こえてくる。
宮殿の階段を取り巻いて香り高い草が青々と茂っていて（誰も訪れず）、
（寵愛を失った女が移される）長門宮に依りかかる。
憂い悲しみのあれこれを誰に語ればいいの。
あなたへの思いを集めて立ちつくせば、
宮殿は黄昏れようとしている。

〔謁金門〕はこういう詞でした。

空しく思うばかりで、
便りを伝えようにもすべがない。
（あなたは）天上の姮娥のようで、誰も知らない。
手紙を送ろうにもいずこに求めればよいのか。

眠りから醒めたばかりで力なく、
あなたの筆跡を見るのも耐え切れない。
庭に満ちる落花 春はひっそり。
香り高い草が青々と茂っている様子を見ると腸を断たれる思い。